

政権交代下の地方官人事

——戦前知事は「浮き草稼業」だったのか——

鵜 養 幸 雄

はじめに

- I. I～Ⅳ期における知事の異動の状況
- II. 政権交代（二大政党時代）と知事人事（Ⅲ期）
- III. 「名物知事」列伝
- おわりに

はじめに

戦前の内務官僚として複数の知事職を歴任した半井清は、『浮き草の記』と題した回顧録を著している。その名をとどろかせたのは「赴任拒否騒動」¹⁾であったが、戦前内務官僚、特に知事の人事が頻繁に行われ、全国にわたる異動、突然の「お役ご免」（多くの場合、制度的には、「官庁事務ノ都合」に基づく休職）もあり、これらのことから、知事の職は「浮き草稼業」とよばれたりしていた²⁾。

特に頻繁な異動が行われたのは、政党内閣による政権交代が繰り返された大正7（1918）年から昭和7（1932）年にかけて（仮にこの期間を「7・7年間」と名付ける。）であり、本稿は、特にこの時期における人事の「嵐」の姿を「数字」の面でも確認しつつ、戦前の知事の全体像を浮かび上がらせようとするものである。

量的側面から、「戦前知事」の配置された時期全体（おおまかに、明治19年7月～昭和20年8月）を便宜的に4つの期間に分けて、各期間の異動回数の特徴をまず概観した上で、「代表的」な知事像を見ていくこととする。

I. I～Ⅳ期における知事の異動の状況

1. 4つの時期

戦前の知事は「勅任」の「地方官」であった³⁾。公選ではなく、政府によって任命されるものであり、中央組織の幹部職以上に、政権政党の分け前の対象になりやすく、また、選挙事務統括者としての意義もあり重要なポストと考えられていた。

戦前の「知事職」がほぼでそろった明治19（1886）年7月から第2次世界大戦が終了する昭和20（1945）年までの期間⁴⁾について、

- ①内閣の交代を機に知事任用が行われるケースも多いことを踏まえ、
 - ②時期内にある程度まとまった特徴が見られるようにしつつ、
 - ③期間に著しい長短が生じないように、
- 次のような4つの時期に設定をした。

・第Ⅰ期：明治19（1886）年7月～明治39（1906）年1月（19.5年間）

伊藤第1次内閣から桂第1次内閣の間で、「藩閥」中心の任用の時期でもある。

・第Ⅱ期：明治39（1906）年1月～大正7（1918）年9月（12.7年間）

西園寺第1次内閣（原内務大臣）から寺内内閣の間で、「新陳代謝」が進められた時期でもある。

・第Ⅲ期：大正7（1918）年9月～昭和7（1932）年5月（13.7年間）

原内閣から犬養内閣の間（「7・7年間」）で、「二部交代制」の時期でもある。

・第Ⅳ期：昭和7（1932）年5月～昭和20（1945）8月（13.2年間）

斎藤内閣から鈴木内閣の間で、政党凋落時代であり、他方、新官僚・革新官僚が注目を集めた時期でもある。

2. 戦前知事の在任状況

第Ⅰ期～第Ⅳ期の間、全国に延べ1,462人の知事が在職し、知事に任命された者の計は687人に上る。一人が

平均して 2.1 回、知事に任命されたことになる⁵⁾。[表 1 参照]

道府県別の状況を見ると、道府県あたりの知事数は平均 31.1 人、一人あたりの在職期間平均は 1.9 年であった。[表 2 参照]

全時期を通じての知事数は、最多が 37 人（広島県及び佐賀県）で、最少は 21 人（岩手県）となっている。[表 5（佐賀県）、表 6（岩手県）参照]

広島県は、第Ⅳ期の知事数が 12 人と全国最多であることから合計でも最多となり、また、佐賀県は、「政争の激しい県」としても有名であり、第Ⅰ期・第Ⅲ期ともに 11 人であった。他方、岩手県は、第Ⅲ期（9 人）を除くと、県令時代から引き継いだ石井省一郎が知事として 4 年 9 月、次の服部一三（後述Ⅲ. 2. 参照）が 7 年 3 月、その他 5 年を超える知事が 2 人（笠井信一・石黒英彦）など、在職期間の長い知事が多かったことによる。

期別にみると、第Ⅰ期は、平均 8.8 人、在職期間の平均が 2.2 年、第Ⅱ期は、平均 4.8 人、在職期間の平均が 2.6 年、第Ⅲ期は、平均 9.3 人、在職期間の平均が 1.5 年、第Ⅳ期は、平均 8.2 人、在職期間の平均が 1.6 年であった。

知事数は、内閣交代とそれに伴う内務大臣・内務次官の人事とも関わるが、内閣・内務大臣・内務次官の数（新内閣での再任は数に含み、総理大臣等による兼任は除く。）は、それぞれ、第Ⅰ期が 11 - 20 - 13、第Ⅱ期が 7 - 8 - 9、第Ⅲ期が 11 - 13 - 13、第Ⅳ期が 13 - 16 - 16 であり、第Ⅳ期は政権交代の頻度に比べて知事の交代が少なかった（少なくなった）のが特徴的であるの対して、相対的に、第Ⅲ期において他の時期に比べて異動が頻繁であったことがわかる。

Ⅱ. 政権交代(二大政党時代)と知事人事(Ⅲ期)

原内閣から犬養内閣に至る「7・7 年間」は、他の時期に比べて知事の異動が激しい時期であったが、この時期は、「政党内閣」が成熟し、特に、立憲政友会と憲政会・民政党の「二大政党による政権交代」が行われた時期でもあった。もっとも、任用の対象者は原則として文官高等試験の合格者であったことから、「紅白戦」、「二部交代制」、「高文スボイルズ」などといわれている。

この時期に際だって異動がはげしくなったのは、岩手県であり、9 人の知事が任命され、在職期間の平均が 1.52 年であり、他の期間との差は、2.3 年と大きな開きがある。

他方、宮城県はこの時期の異動が少なく、唯一他の時期よりも在職期間の平均が長かった(0.7 年の差)県である。[表 3、表 8（宮城県）参照] 宮城県では、大正 4 年の大隈第 2 次内閣時に任官し、寺内内閣を越えて、原内閣後 6 月近く在職した寺田祐之がおり、その後任もかつて同県知事経験者の森正隆が 2 年 1 月在職し、以下、力石雄一郎（後述Ⅲ. 10. 参照）、上田万平、牛塚虎太郎（後述Ⅲ. 14. 参照）、湯沢三千男がそれぞれ 3 年 1 月、2 年半、2 年 10 月近く、2 年 2 月と比較的長期に在職した。

第Ⅲ期の任命回数は、最多が青森県の 14 回、最少の宮城県、山口県が 6 回であった。[表 4、表 7（青森県）、表 8（宮城県）参照]

青森県では、在職 1 年に満たない知事が 8 人もおり、最長も 2 年 1 月弱というめまぐるしい異動が行われた。宮城県は前述のとおり、この時期の異動数は最少で、かつ、平均在職年数が他の時期に比べて長くなっている。山口県では、この時期としては珍しく 4 年在職した中川望（寺内内閣時から引き続き原敬内閣でも異動しなかった）、3 年 9 月近い大森吉五郎、2 年半の橋本正治をはじめ、政権交代時の人事異動を含みつつも、いずれの知事も 1 年を超えて在職した。

全期間平均の任命回数が 31.1 回である中、第Ⅲ期だけで 10 回以上となったのは、19 県に及んでいる。[表 4 参照]（前述の佐賀県以外に「政争の激しい県」といわれた秋田県、石川県、熊本県、大分県などはいずれも 10 回以上である。）

この時期は、間に普通選挙の実施という制度上の変化を含むが、「政党」による知事の人事という点では、まとめて考察の対象とすることができる。なお、後半期の昭和 4（1929）年、5（1930）年の「大異動」に関して、頻繁な異動の弊害とその対策が論じられ、「知事公選論」も展開されている⁶⁾。

他方で、5.15 事件後の斎藤内閣については、状況が一変したものにとらえられ、この内閣総辞職時の新聞報道でも、地方官人事等への質的な変化が指摘されている⁷⁾。

Ⅲ. 「名物知事」列伝

次に、ミクロ的な観察として、各地歴代の知事の中から、在職期間、赴任地数、政党との関係（いわゆる「有色」度）、住民の印象などさまざまな要素から「代表例」として、次の 19 人を取り上げ、そこから戦前知事の姿

を見ることとする。

- まずは、第Ⅰ期の知事像として代表的な人物のうち、
 - ・1カ所の長さでは群を抜く「琉球王」奈良原繁、
 - ・知事在職期間の長さからは25年近くに及んだ服部一三、
 - ・「内務官僚」としても代表的な人物である大森鐘一、
 - ・知事ポストへの執着を示した「壇ノ浦知事」宗像政、
 - ・文部畑出身知事の江木千之、
- 次いで、第Ⅱ期の知事像がうかがえる人物として、
- ・8知事経験の若林資蔵、
 - ・波瀾万丈、内務次官まで昇進した杉山四五郎、
 - ・「黒幕」伊沢多喜男、
 - ・施策などから「名知事」といわれた有吉忠一、
- 第Ⅲ期の「浮き草」状況を描き出す群像として、
- ・「当代稀に見る官海遊泳術の達人」力石雄一郎、
 - ・「ヌラリクラリ党のエキスパート」平塚広義、
 - ・「鮮やかな宙返り」中川健蔵、
 - ・「細く長く党のチャンピオン」長野幹、
 - ・「不死身の虎太郎」牛塚虎太郎、
 - ・「赴任拒否」・「アイデアマン知事」半井清、
 - ・『官界の表裏』著者の川村貞四郎、
 - ・苦学の秀才として名高い高橋雄豹、
- 第Ⅳ期の戦前末期の知事の姿として、
- ・「栄光と挫折」の内務官僚・柴山博
 - ・「沖縄の島守」島田叡、

について、順次、そのプロフィールを知事歴を中心にすることとする。（以下の年号については、煩雑さを避けるため、明治から昭和については、元号のみを用いる。また、出身地は現在の都道府県名で表示。）

1. 奈良原繁

- ・天保5（1834）年生、鹿児島県出身。
- ・「明治維新の志士」・鹿児島藩士で、「寺田屋騒動」にも加担した。伊藤博文、松方正義らの先輩格で、官界には、明治12年内務省御用掛をふり出しに、その後、元老院議員、静岡県令（三島通庸（酒田、山形、福島、栃木）、藤村紫朗（山梨）とともに3県令の一人といわれた）、宮中顧問官等を歴任。
- ・知事歴：
沖縄県（明25.7.20～41.4.6）
- ・沖縄県初代の知事であり、1任地としては最長、15年9月近くに及ぶ。知事時代の評価はかなり分かれ、旧

薩摩藩・鹿児島県人を多数登用し、時として弾圧的手段に出たことから、悪いイメージの語として「琉球王」と呼ばれる反面、産業開発や就学率向上に努め、また、人情派としてのエピソードにも富んでいる。離任時には多数の県民が別れを惜しんだといわれるが、奥武山公園内の碑は、現在では地元住民にも忘れられかけている（後述19.の島田叡とは対照的である。）

2. 服部一三

- ・嘉永4（1851）年生、山口県出身。
- ・明治2年渡米、予備学校、ロトゲルスカレッジ理学部、東京帝国大学法学部長等を歴任。
- ・知事歴：
岩手県（明24.4.24～31.7.28）
広島県（明31.7.28～31.12.18）
長崎県（明31.12.28～33.10.25）
兵庫県（明33.10.25～大5.4.28）
- ・文部行政に長く携わった後の知事任官で、就任時は「学者知事」といわれたが、知事としての通算在職期間は最長、4県で25年近くに及んだ。岩手県知事時代に時の大隈首相から「君は8年間動かぬと言っているそうだが、その約束の8年も過ぎた。広島の県会が腐敗して手が付けられんから行ってくれ」と言われて広島に転じたとされる。しかし同地では在職5月足らず、県会でも開・閉会時に「形どおりのあいさつ」をしたにすぎなかったといわれる。「官吏が官吏と交際していたのでは、互いに利益するところが少ない」と、政党関係者や実業家ともよくつき合ったといわれる。兵庫県知事退任は、再び大隈（第2次）内閣時、世代交代として「円満退職」したとされる。

3. 大森鐘一

- ・安政3（1856）年生、静岡県出身。
- ・明治6年陸軍省出仕、司法省、内務書記官、内務大臣秘書官、県治局長兼警保局長等を歴任。
- ・知事歴：
長崎県（明26.3.10～30.4.7）
兵庫県（明30.4.7～33.10.25）
京都府（明35.2.8～大5.4.28）
- ・服部一三とともに「地方官界の二元老」といわれる。通算在職期間は21年10月に及び服部に次ぐ（20年超はこの二人だけ）。1任地としても、京都府知事と

して14年3月近くで、奈良原・服部に次ぐ。「純吏型」で「温厚謹厳」な人物といわれ、また、「内務官僚」としても代表的な人物とされ、子の佳一が内務省任官する際に示した訓戒は昭和期の内務省内でも読み継がれた。京都府時代には農村経済に力を注ぎ、退任は、服部同様、大隈（第2次）内閣時、世代交代として「円満退職」したとされる。晩年、皇太后大夫としても厚い信任を受けたという。

4. 宗像（田村）政

- ・安政元（1854）年生、熊本県出身。
- ・西南の役では薩軍、入獄5年、明治27年進歩党代議士、松隈内閣下に議員から知事となり、多数県の知事を歴任。
- ・知事歴：
 - 埼玉県（明30.4.7～31.1.26）
 - 青森県（明32.1.21～34.4.17）
 - 福井県（明34.4.17～35.2.8）
 - 宮城県（明35.2.8～36.1.22）
 - 高知県（明36.6.29～40.1.10）
 - 広島県（明40.1.11～45.3.28）
 - 熊本県（明45.3.28～大元12.30）
 - 東京府（大元12.30～大3.4.21）
- ・松隈内閣（松方首相が進歩党と提携）時に代議士出身の知事として任官。しかし、その内閣の総辞職に際し、当時の進歩党出身知事が相次ぎ辞職する中で、尾崎行雄から受けた辞職勧告書に対して、「ご親切なる忠言に候得共小生は頑骨依然飽まで辞職せず壇の浦まで遣る決心に候」と答えたことから、「壇ノ浦知事」といわれた。その後さらに7任地を数え、任地数合計8は、若林（後述6.）とともに最多である。

5. 江木千之

- ・嘉永6（1853）年生、山口県出身。
- ・明治7年～24年文部省に勤務、内務大臣秘書官、県治局長等歴任。
- ・知事歴：
 - 茨城県（明29.2.6～30.4.7）
 - 栃木県（明30.4.7～11.13）
 - 愛知県（明30.11.13～31.12.28）
 - 広島県（明31.12.28～36.6.29）
 - 熊本県（明36.6.29～40.1.11）

- ・17年間文部省に勤務、普通学務局長、参事官を経て退官したが、翌25年山県有朋のすすめで内務省に入り、大臣秘書官を経て、26年県治局長となった（当時の衛生局長は後藤新平）後、本人の希望もあって茨城県知事となり、その後さらに4県の知事を歴任した。清浦内閣時には文部大臣となった。

6. 若林資蔵

- ・慶応元（1865）年生、新潟県出身。
- ・明治26年帝国大学法科大学卒。
- ・知事歴：
 - 島根県（明41.3.28～41.8.26）
 - 奈良県（明43.6.14～大2.6.1）
 - 山梨県（大2.6.1～3.6.9）
 - 佐賀県（大3.6.9～4.1.8）
 - 香川県（大4.1.8～6.1.29）
 - 愛媛県（大6.1.29～8.4.17）
 - 広島県（大8.4.18～10.7.19）
 - 京都府（大10.7.19～11.10.16）
- ・「帝大無試験特権」（帝国大学卒業者には高等官への就任資格としての文官高等試験が免除される）最後の世代。任官15年目の知事就任。「直情径行」「頑固一徹」な性格だったといわれ、議会との関係では「原案執行」をたびたび行ったことから「原案執行知事」とも呼ばれた。ときに稚気も示し、ダンディーさ（縁なし眼鏡とステッキ愛用）と古武士的風格を共にもっていたともいわれ、政党との関係では、「無色さ」を示しつつ、またときとして「時の内閣への忠勤」を訓示したりした。任地8は宗像とともに最多。

7. 杉山四五郎

- ・明治3年生、新潟県出身。
- ・明治27年東京帝国大学法科大学政治学科卒、28年文官高等試験合格。山本内閣の原内相時に衛生局長、次官レースでは小橋一太に敗れ、関東庁事務総長に転じたものの、復活、次官に至る。
- ・知事歴：
 - 高知県（明43.6.14～大2.5.31）
 - 宮崎県（大10.6.3～11.10.16）
 - 京都府（昭2.4.28～7.19）
- ・知事就任は任官15年目。原敬に重用され原内相時に衛生局長となったが、政権交代や自身の体調不良もあ

り、「波瀾万丈」の官吏生活を送る。娘婿の父鈴木喜三郎内相によって内務次官まで昇進したといわれる。

8. 伊沢多喜男

- ・明治2年生、長野県出身。
- ・明治28年東京帝国大学法科大学政治学科卒・文官高等試験合格、内務省任官。
- ・知事歴：
 - 和歌山県（明40.1.11～42.7.30）
 - 愛媛県（明42.7.30～大元.12.29）
 - 新潟県（大元.12.30～2.3.3）
- ・知事就任は任官12年目と早い。愛媛県赴任時には、前任の安藤謙介（政友）の方針を覆し、原敬への失望からそれ以降憲政・民政系へに転じたといわれるが、新潟県の後任知事が安藤謙介で、伊沢の時建てた施設を壊したといわれる。内務省人事に対する発言力・影響力の大きさから「黒幕」ともいわれた人物である。

9. 有吉忠一

- ・明治6年生、京都府出身。
- ・明治29年帝国大学法科大学英法科卒、文官高等試験合格・内務省入り。
- ・原内相下での参事官、韓国総督府総務長官、朝鮮総督府政務総監等を歴任。
- ・知事歴：
 - 千葉県（明41.3.28～43.6.14）
 - 宮崎県（明44.3.13～大4.8.12）
 - 神奈川県（大4.8.12～大8.4.18）
 - 兵庫県（大8.4.18～11.6.16）
- ・内務省参事官時代には、湯浅倉平とともに辣腕参事官として知られ、知事時代には「名知事」といわれた。園芸学校創設・鉄道敷設（千葉）、開田・道路・鉄道整備（宮崎）、多摩川改修（「有吉堤」）、労使協調施策（兵庫）等の業績を残した。知事就任は任官13年目。政争の渦中を避け（非政友）、「仕事師」としても知られた。

10. 力石雄一郎

- ・明治9年生、愛媛県出身。
- ・明治33年東京帝国大学法律学科民法科卒、文官高等試験合格、内務省に任官。

- ・知事歴：
 - 長野県（大3.4.28～4.8.12）
 - 大分県（大4.8.12～6.1.17）
 - 茨城県（大6.1.17～大10.5.27）
 - 宮城県（大10.5.27～大13.6.24）
 - 秋田県（昭5.17～3.2.28）
 - 新潟県（昭3.2.28～5.25）
 - 大阪府（昭3.5.25～4.7.5）
- ・知事就任は任官15年目。その後官界生活約30年の中で、宮城県知事の後に加藤内閣で「休職」となったのちに「政友系」となったものの、9代の内閣の下で7府県の知事を歴任し、「当代稀に見る官海遊泳術の達人」といわれた。

11. 平塚広義

- ・明治8年生、山形県出身。
- ・明治35年東京帝国大学法科大学政治科卒、文官高等試験合格、内務省に任官。
- ・知事歴：
 - 栃木県（大5.6.2～大11.10.16）
 - 長崎県（大11.10.16～12.10.25）
 - 兵庫県（大12.10.25～14.9.16）
 - 東京府（大14.9.16～昭4.7.5）
- ・知事就任は任官14年目。「ヌラリクラー党のエキスパート」といわれ、政党色を明確にしない「灰色」でありつつ、政権交代の「嵐」の中でも途切れることなく知事を続け、かつ、異動のたびに昇進を重ね、主要県知事を経、東京府知事に至った。

12. 中川健蔵

- ・明治8年生、新潟県出身。
- ・明治35年東京帝国大学法科大学独法科卒・文官高等試験合格、内務省任官。東京府知事後には文部次官に就任。
- ・知事歴：
 - 香川県（大12.10.25～13.6.24）
 - 熊本県（大13.6.24～14.9.16）
 - 北海道（大14.9.16～昭2.4.30）
 - 東京府（昭4.7.5～10.9）
- ・大学卒業は平塚と同期であるが、内務省から内閣、さらに通信省に移り通信局長となるなどを経ての知事就任であり、任官22年目であった。熊本県時代に政友

系から非政友系（憲政派）に転じて「鮮やかな宙返り」といわれ、平塚の後の東京府知事に登用された。

13. 長野幹

- ・明治10年生、長野県出身。
- ・明治36年東京帝国大学法科英法科卒、文官高等試験合格、内務省に任官。
- ・知事歴：
 - 三重県（大 5.10.13 ~ 8.4.18）
 - 山梨県（大 8.4.18 ~ 11.10.16）
 - 秋田県（大 13.12.1 ~ 15.9.28）
 - 鹿児島県（大 15.9.28 ~ 昭 2.5.17）
- ・知事就任は任官14年目。「純吏型」で「分をわきまえた」事務処理によって、政権交代の嵐の中で一度も「浪人生活」を送らず、「細く長く党のチャンピオン」といわれた。

14. 牛塚虎太郎

- ・明治12年生、富山県出身。
- ・明治38年東京帝国大学政治科卒、文官高等試験合格。商船学校教授、中央大学講師、逓信省職員、内閣（即位の礼で活躍）統計局長などを歴任。
- ・知事歴：
 - 岩手県（大 11.10.16 ~ 13.7.23）
 - 群馬県（大 13.7.23 ~ 15.12.18）
 - 宮城県（大 15.12.18 ~ 昭 4.10.9）
 - 東京府（昭 4.10.9 ~ 6.12.18）
- ・内閣統計局長の後、統計局が国勢院となった際に第一部長となり、第1回国勢調査の企画に当たり、その後、地方行政に転じ、知事就任は任官18年目。超党派的でしかも緻密で手堅い手腕を発揮し、政権交代の中でも着実に「栄進」して東京府知事に至り、「不死身の虎太郎」といわれた。

15. 半井清

- ・明治21年生、岡山県出身。
- ・大正2年東京帝国大学独法科卒・文官高等試験合格、内務省に任官。
- ・知事歴：
 - 佐賀県（昭 6.1.20 ~ 12.18）
 - 宮崎県（昭 6.12.18 ~ 21）
 - 栃木県（昭 7.6.28 ~ 9.7.10）

宮城県（昭 9.7.10 ~ 10.6.28）

神奈川県（昭 11.3.13 ~ 13.12.23）

北海道（昭 13.12.23 ~ 14.9.5）

大阪府（昭 14.9.5 ~ 16.1.7）

- ・知事就任は任官19年目（大学卒業が大正時代の世代からは、知事就任に20年近くを要するようになる）。自ら「生来計画好き」と言うとおりに、それぞれの任地で「アイデアマン知事」「産業知事」ぶりを発揮した（食用どじょうの販売（佐賀）、観光地鬼怒川と塩原とを結ぶ道路の敷設（栃木）、東北6県の振興計画のとりまとめ一本化（宮城）、京浜運河・相模川ダム・鶴見川改修（神奈川）、苫小牧港湾建設計画（北海道）、火力発電強化・米買付（大阪）等）。7・7年間末期からの知事就任であったが、民政党系と見られた。

16. 川村貞四郎

- ・明治23年生、愛知県出身。
- ・大正3年文官高等試験合格、同4年東京帝国大学独法科卒、内務省任官。
- ・知事歴：
 - 山形県（昭 6.12.18 ~ 7.6.28）
- ・任官18年目の知事就任であったが、半年余りで「休職」となり、そこで官界に見切りをつけ、翌年に退官し、実業界等で活躍した。当時の経験・交友をもとに『官界の表裏』を著している。

17. 高橋雄豹

- ・明治22年生、愛媛県出身。
- ・大正4年文官高等試験合格、内務省任官、主として警察関係の職務に従事。
- ・知事歴：
 - 香川県（昭 6.6.27 ~ 12.18）
- ・苦学の秀才として有名であり、北予中学校卒業後、独学で文官高等試験をトップ合格した。知事就任は任官17年で半年足らずの一度限りであった。警察制度や警察の歴史などに関する書籍等を多数著した。

18. 柴山博

- ・明治30年生、愛知県出身。
- ・大正9年文官高等試験合格、同10年東京帝国大学独法科卒後内務省任官。
- ・知事歴：

鹿児島県（昭 18.4.23 ～ 20.4.21）

- ・任官 18 年での知事就任。在任中に警察部長から空襲に備えて天井を外すよう求められたが、これに反対し、「喧嘩両成敗」の形で退任に至ったといわれる。官界を離れ、翌年弁護士を開業した（大正 10 年の帝国大学卒業者であったため、無試験での弁護士資格を得ていた）。家族から見た姿が『内務官僚の栄光と破滅』に記されている。

19. 島田勲

- ・明治 34 年生、兵庫県出身。
- ・大正 14 年東京帝国大学法科卒・文官高等試験合格。
- ・知事歴：
沖縄県（昭 20.1.12 ～ 6.23）
- ・任官 20 年目の知事就任。戦争末期、前任知事（泉守紀）が沖縄戦を見越して出張名目で離県したままとなった（この点については、必ずしも「逃げ出した」わけではないという説もある）中で、沖縄赴任を打診され、生命の危険を顧みずにこれを受けたとされる。着任後はさまざまな県民のための施策を実施し、空襲激化に伴い県庁を首里の壕内に移し、少数の部下とともに壕にとどまった後に消息不明となった。県民により「島守の塔」が建てられ、島田は「沖縄の島守」と呼ばれている。

おわりに

戦前の内務官僚にとって、「知事」は実現可能な夢のポストでもあった。「良二千石」といわれ、その「輝かしい地位」は小説の題材にもなっている。

他方、本省・地方におけるキャリアパスの一環でもあり、政権交代の中で、知事の地位を政治側も官僚側も活用し、そこに緊張感の伴った競争が行われていたものといえる。

しかし、昭和 7（1932）年以降の「政党の凋落」の下では、逆に「色」が見えなくなっただけに、むしろ透明性を欠くスボイルズの危険が現れ始めたものといえよう。

政権党がその政策実現を図るために「使いやすい」人材を配置するという意味での「政治（的）任用」は、必ずしも政府外から人材を調達するやり方によるだけでなく、前述のとおり、部内の「高文官僚」の中から選抜するという形を中心に行われていた。期待された役割の

限界（選挙対策等）もあり、その評価を軽々に語ることはできないが、自治体に残した財産は決して負のものばかりではない。旧内務官僚の「土地惚れ」、そして言葉の良し悪しは別として「牧民官」の心意気の発揮の場でもあった。中央といくつかの地方の行き来の中で育成された資質の評価に、情実的な要素を持ちつつ、（主観的ではあっても）「適材」の任用の結果が、第Ⅲ期には明確に現れていたものといえる。今回は論じきれなかったが、「知事」ポストの官吏としてのキャリアパスの中での意義及び内務省人事全体の中での位置づけについての考察は別の機会に示したいと考えている（本稿の末尾に、「参考」として各内閣時の内務省の本省局長の状況を記した）。

また、頻繁な人事異動という制約条件の中で、個々の知事が試みた行政の意義については、特に続く時期（新官僚・革新官僚が注目を浴びた時代）とも比較しつつ、更に検証していく価値があるものといえよう。この意味での政治（的）任用と官僚といったテーマに関する史的経験についても稿を改めて論じたいと考えている。

注

- 1) 半井氏が、昭和 6 年 12 月、宮崎県知事に異動との発令を受けたが、これを拒否し、辞職を申し出た事件である。「赴任先」の宮崎県側からは、同県の「格」を気にして来てくれなかったような記述もあるが（『日本の歴代知事』）、他方、同氏によれば、それまで佐賀県知事として計画していた案が、政権交代によって議会への提出が妨げられる動きがあり、これに反発したことに対する人事上の措置として急な「異動の内示」があり、筋を通すべく拒否・辞職の挙に出たのが騒動の原因であったという。実際の赴任はなく、「履歴書の上では 3 日間」の宮崎県知事となった（『内務省史』、『浮き草の思い出』及び『佐賀県知事物語』）。もっとも、同氏は自らの知事経験を「10 年間、6 県」としており、ここには宮崎県は含まれていない。
- 2) 栗林貞一『地方官界の変遷』（世界社、昭和 5（1930）年）の序の書き出しは、「今日では『うきぐさ』といふ詞が地方官の代名詞になつてゐる。」とし、かつて維新の元勳を前に「傲然と啖呵を切つた県令時代」と比べて「県会議員様々の御機嫌を先づ伺ふやうになつて来た『うきぐさ』知事時代に至つたと記している。また、例えば、伊藤金次郎『地方官生活と党人氣質』（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、大正 11（1922）年）の序でも「うき草の地方官」と称されている。
- 3) 地方官官制第 1 条により、知事は勅任と規定されていた（当初明治 39 年勅令 131 号、大正 15 年勅令 147 号により全改）。
- 4) 明治 19（1886）年 7 月 19 日から昭和 20（1945）年 8 月

15 日在職までの知事。

なお、先行して「知事」ポストが設けられた三府及び「知事」設置が遅れた県（奈良、香川）もあるが、同一の期間について整理した。

- 5) なお、戦前知事についての数量的な分析については、鈴木淳一「知事さんあれこれ」(『内務省史 第4巻』427 - 443 頁)があるが、「知事」としての対象期間が異なることから、本稿の数字とは一致していない。
- 6) 末松偕一郎「地方行政上の一障害 地方官の更迭と其の防止策」『地方行政』昭和4(1929)年10月号、10 - 16 頁。「内務省の年中行事たる地方官の大更迭がまた行はれた。現内閣成立以来1年2箇月間、3回に亘る地方官の大異動に依り、1道3府43県中、長官の更迭せざるものは富山1県のみといふことである。部長以下に於ても、今回のみの休職者17名、異動69名に及び国家及地方団体の蒙る損害は多大である。」この頻繁な地方官更迭による弊害としては、「地方行政の頹廢」、「旅費その他経費の濫費」、及び「官吏の地位及責任觀念の不安定」を挙げ、他方、頻繁な更迭の防止策としては「現行制度に依る身分保障」と並べて「知事公選論」を掲げている。

また、後藤文夫「地方政治と政党」『地方行政』昭和5(1930)年10月号、2 - 13 頁。

わが国に地方自治の制度が布かれて以来の沿革から3つの時期に分けられるとする。第1の時期は、「中央政治に於ては官僚中心の政治が行はれ、政党は未だその勢力が微弱だった時代」、第2の時期は「中央政治に於て官僚の勢力は尚ほ持続されては居つたけれども政党の勢力が漸次伸張して来て、先づ政党と官僚との争が激しくなり、遂には政党の勢力は到底無視する事が出来ない状態になつて、官僚政治家は屢々政党と妥協、協調して、政権が或は政党により或は官僚によつて交互に把握されるといふやうな状況まで移り変つて来た時代」で、第3の時期は「中央に於て政党政治が略々確立されて官僚の勢力が殆ど影を潜むるに至つた時代」とする。そして、「地方自治に於る政党の勢力の進出に伴ふ弊害」として、府県の人事、財政への影響が大きく、「党派的な感情」のために「府県の永遠の福利といふ事を考へる余地が少なくなつた」としている。その対処としては、「政党自身の自制」の他、制度の問題としては「身分保障」と「地方官公選」を挙げている。

- 7) 昭和9(1934)年7月4日東京日日新聞は「行政官は殉ぜず、今までと違う政変風景」の見出しで、「今次の斎藤内閣総辞職は、行政官の身分保障令の制定並びに従来自由任用であつた警保局長、警視総監を純然たる事務官とする文官任用令に編入した最初の政変なので、これら行政官の進退問題は注目されているが、既往政党内閣時代には総辞職を執行するや、直ちに警保局長、警視総監はまず第一に辞表を提出するほか、地方長官以下地方官も時の政府に殉じて辞職するもの続出の状態であつたが、今回の斎藤内閣総辞職に際しての行政官の態度は大いにその趣を異にし、3日の総辞職に当ても潮次

官、松本警保局長、藤沼警視総監等は勿論、地方官も直ちに辞表を山本内相に提出せる者なく、その進退については極めて慎重なる態度をとり、後継内閣の内相決定を待っておもむろにその進退を決せんとしていることは従来に比し特異な現象で、その進退を特に注目されている。」と記している。

昭和9(1934)年7月4日大阪毎日新聞「非常時内閣、2年1ヶ月の跡を見る」では、この内閣は、5・15事件の「極度に動揺していた人心の不安を一掃するという重大使命を帯び」たことから、「あまり思い切った新政策実行を期待するよりも、軌道はずれた当時の情勢を常態に復することを先決問題として要望」され、「多くは事なかれ主義に基づくその日暮らしに終始するであろうとは当初から予想されたところであつた」が、「けれども在職2カ年の長き間のこと、つぶさにその内容を検討する時、久方ぶりの官僚濃き内閣であつたがために、官僚に対する種々の恩典を設けたということもあるが、その人事に関しては至極公平、すべて好評を博し、昭和7年6月28日、第1回の地方官異動に際しても全国27府県におよび、一部政友会方面よりは非難の声を受けたこともあつたが概して評判よく」、宮内・外務・陸軍大臣や枢密院人事など、「人事行政の大なる功績というべ」きであるとする。そして、「次にこの内閣は昭和7年9月、官吏身分保障に関する規定を実施することになり、同11月にはさらに巡査分限令をも施行することになった。もっとも官吏の身分保障については昨今能率の減退、後進の榮進阻止など、一部に非難の起こっていることは事実であるが、まじめな官吏のために単なる感情や党派心から簡単に解職されるがごときことなきよう身分を保障したことは、これも功の部類に入ろう。」とする。もっとも、「斎藤内閣の残した最大のものは、『国際連盟脱退』と『5・15事件跡始末』としている。

参考文献

- ・歴代知事編纂会『日本の歴代知事』（第1巻～第3巻）昭和55(1980)～57(1982)年
- ・秦郁彦編『日本官僚制総合事典』東京大学出版会、平成13(2001)年
- ・同『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、平成14(2002)年
- ・栗林貞一『地方官界の変遷』世界社、昭和5(1930)年
- ・佐久間晃編『官界人物譚』日本官界情報社、昭和33(1958)年
- ・大霞会『内務省史』第1巻～第4巻、地方財務協会、昭和46(1971)年
- ・大霞会『内務省外史』地方財務協会、昭和52(1977)年
- ・大霞会『続内務省外史』地方財務協会、昭和62(1987)年
- ・大霞会『大霞』昭和33(1958)年～(年2回刊)
- ・升味準之輔『日本政党史論 第2巻～第7巻』東京大学出版会、昭和41(1966)年～55(1980)年
- ・林茂・辻清明編『日本内閣史録 1～4』第一法規出版、昭

和 56（1981）年

- ・片岡正昭『知事職をめぐる官僚と政治家』木鐸社、平成 6（1994）年
- ・百瀬孝『内務省』PHP 研究所、平成 13（2001）年
- ・秦郁彦『官僚の研究』講談社、昭和 58（1983）年
- ・水谷三公『官僚の風貌』中央公論新社、平成 11（1999）年
- ・池田宏編『大森鐘一』昭和 5（1930）年
- ・半井清『浮き草の思い出』昭和 47（1972）年
- ・小田博也『埼玉県政と知事の歴史的研究』新興出版、平成 8（1996）年
- ・森田美比『茨城県政と歴代知事』暁印書館、平成 3（1991）年
- ・蝦原幸作『茨城県政夜話』筑波書林、昭和 59（1984）年
- ・高橋哲夫『ふくしま知事列伝』福島民報社、昭和 63（1988）年
- ・読売新聞佐賀支局編『佐賀県 知事物語』金華堂、昭和 44（1969）年
- ・川村貞二郎『明治・大正政治史料 官界の表裏』雄山閣、昭和 49（1974）年
- ・田村洋三『沖縄の島守』中央公論新社、平成 15（2003）年
- ・野里洋『汚名』講談社、平成 5（1993）年
- ・柴山肇『内務官僚の栄光と破滅』勉誠出版、平成 14（2002）年

表 1 戦前知事の在任状況 (明 19.7 ~ 昭 20.8)

	戦前知事数	平均在任年数	I 期	(平均)	II 期	(平均)	III 期	(平均)	IV 期	(平均)
北海道	27(人)	2.19(年)	8(人)	2.44(年)	6(人)	2.12(年)	7(人)	1.96(年)	6(人)	2.20(年)
青森	36	1.64	8	2.44	5	2.54	14	0.98	9	1.47
岩手	21	2.81	5	3.90	3	4.23	9	1.52	4	3.30
宮城	34	1.74	13	1.50	4	3.18	6	2.28	11	1.20
秋田	36	1.64	11	1.77	7	1.81	10	1.37	8	1.65
山形	28	2.11	8	2.44	4	3.18	9	1.52	7	1.89
福島	35	1.69	10	1.95	6	2.12	10	1.37	9	1.47
茨城	35	1.69	10	1.95	5	2.54	10	1.37	10	1.32
栃木	31	1.91	9	2.17	5	2.54	9	1.52	8	1.65
群馬	36	1.64	11	1.77	8	1.59	9	1.52	8	1.65
埼玉	36	1.64	11	1.77	4	3.18	11	1.25	10	1.32
千葉	31	1.91	9	2.17	5	2.54	10	1.37	7	1.89
東京	27	2.19	8	2.44	4	3.18	7	1.96	8	1.65
神奈川	24	2.46	6	3.25	3	4.23	7	1.96	8	1.65
新潟	35	1.69	8	2.44	7	1.81	10	1.37	10	1.32
富山	31	1.91	12	1.63	4	3.18	8	1.71	7	1.89
石川	35	1.69	10	1.95	5	2.54	11	1.25	9	1.47
福井	32	1.85	9	2.17	5	2.54	9	1.52	9	1.47
山梨	35	1.69	12	1.63	5	2.54	10	1.37	8	1.65
長野	29	2.04	9	2.17	4	3.18	7	1.96	9	1.47
岐阜	30	1.97	8	2.44	5	2.54	8	1.71	9	1.47
静岡	33	1.79	10	1.95	6	2.12	9	1.52	8	1.65
愛知	31	1.91	10	1.95	2	6.35	9	1.52	10	1.32
三重	36	1.64	10	1.95	7	1.81	9	1.52	10	1.32
滋賀	31	1.91	9	2.17	4	3.18	10	1.37	8	1.65
京都	28	2.11	8	2.44	2	6.35	9	1.52	9	1.47
大阪	28	2.11	8	2.44	3	4.23	8	1.71	9	1.47
兵庫	22	2.69	5	3.90	1	12.70	9	1.52	7	1.89
奈良	29	2.04	6	3.25	6	2.12	8	1.71	9	1.47
和歌山	30	1.97	9	2.17	5	2.54	9	1.52	7	1.89
鳥取	34	1.74	11	1.77	6	2.12	10	1.37	7	1.89
島根	32	1.85	9	2.17	5	2.54	9	1.52	9	1.47
岡山	29	2.04	5	3.90	5	2.54	11	1.25	8	1.65
広島	37	1.60	9	2.17	5	2.54	11	1.25	12	1.10
山口	24	2.46	7	2.79	5	2.54	6	2.28	6	2.20
徳島	33	1.79	11	1.77	6	2.12	8	1.71	8	1.65
香川	34	1.74	11	1.77	4	3.18	9	1.52	10	1.32
愛媛	35	1.69	12	1.63	4	3.18	9	1.52	10	1.32
高知	33	1.79	9	2.17	6	2.12	10	1.37	8	1.65
福岡	27	2.19	7	2.79	4	3.18	8	1.71	8	1.65
佐賀	37	1.60	11	1.77	7	1.81	11	1.25	8	1.65
長崎	29	2.04	7	2.79	4	3.18	11	1.25	7	1.89
熊本	30	1.97	5	3.90	7	1.81	11	1.25	7	1.89
大分	34	1.74	10	1.95	6	2.12	10	1.37	8	1.65
宮崎	33	1.79	10	1.95	4	3.18	12	1.14	7	1.89
鹿児島	26	2.27	5	3.90	4	3.18	9	1.52	8	1.65
沖縄	23	2.57	4	4.88	5	2.54	9	1.52	5	2.64
(計)	1462	1.90	413	2.22	227	2.63	435	1.48	387	1.60
(平均)	31.11	1.90	8.79	2.22	4.83	2.63	9.26	1.48	8.23	1.60

(『日本の歴代知事』、『日本官僚制総合辞典』、『内務省史』等をもとに、筆者が作成。以下の表も同じ。)

表 2 戦前知事の在任状況（知事数ソート）

	戦前知事数	平均在任年数	I 期	(平均)	II 期	(平均)	III 期	(平均)	IV 期	(平均)
広島	37(人)	1.60(年)	9(人)	2.17(年)	5(人)	2.54(年)	11(人)	1.25(年)	12(人)	1.10(年)
佐賀	37	1.60	11	1.77	7	1.81	11	1.25	8	1.65
青森	36	1.64	8	2.44	5	2.54	14	0.98	9	1.47
秋田	36	1.64	11	1.77	7	1.81	10	1.37	8	1.65
群馬	36	1.64	11	1.77	8	1.59	9	1.52	8	1.65
埼玉	36	1.64	11	1.77	4	3.18	11	1.25	10	1.32
三重	36	1.64	10	1.95	7	1.81	9	1.52	10	1.32
福島	35	1.69	10	1.95	6	2.12	10	1.37	9	1.47
茨城	35	1.69	10	1.95	5	2.54	10	1.37	10	1.32
新潟	35	1.69	8	2.44	7	1.81	10	1.37	10	1.32
石川	35	1.69	10	1.95	5	2.54	11	1.25	9	1.47
山梨	35	1.69	12	1.63	5	2.54	10	1.37	8	1.65
愛媛	35	1.69	12	1.63	4	3.18	9	1.52	10	1.32
宮城	34	1.74	13	1.50	4	3.18	6	2.28	11	1.20
鳥取	34	1.74	11	1.77	6	2.12	10	1.37	7	1.89
香川	34	1.74	11	1.77	4	3.18	9	1.52	10	1.32
大分	34	1.74	10	1.95	6	2.12	10	1.37	8	1.65
静岡	33	1.79	10	1.95	6	2.12	9	1.52	8	1.65
徳島	33	1.79	11	1.77	6	2.12	8	1.71	8	1.65
高知	33	1.79	9	2.17	6	2.12	10	1.37	8	1.65
宮崎	33	1.79	10	1.95	4	3.18	12	1.14	7	1.89
福井	32	1.85	9	2.17	5	2.54	9	1.52	9	1.47
島根	32	1.85	9	2.17	5	2.54	9	1.52	9	1.47
栃木	31	1.91	9	2.17	5	2.54	9	1.52	8	1.65
千葉	31	1.91	9	2.17	5	2.54	10	1.37	7	1.89
富山	31	1.91	12	1.63	4	3.18	8	1.71	7	1.89
愛知	31	1.91	10	1.95	2	6.35	9	1.52	10	1.32
滋賀	31	1.91	9	2.17	4	3.18	10	1.37	8	1.65
岐阜	30	1.97	8	2.44	5	2.54	8	1.71	9	1.47
和歌山	30	1.97	9	2.17	5	2.54	9	1.52	7	1.89
熊本	30	1.97	5	3.90	7	1.81	11	1.25	7	1.89
長野	29	2.04	9	2.17	4	3.18	7	1.96	9	1.47
奈良	29	2.04	6	3.25	6	2.12	8	1.71	9	1.47
岡山	29	2.04	5	3.90	5	2.54	11	1.25	8	1.65
長崎	29	2.04	7	2.79	4	3.18	11	1.25	7	1.89
山形	28	2.11	8	2.44	4	3.18	9	1.52	7	1.89
京都	28	2.11	8	2.44	2	6.35	9	1.52	9	1.47
大阪	28	2.11	8	2.44	3	4.23	8	1.71	9	1.47
北海道	27	2.19	8	2.44	6	2.12	7	1.96	6	2.20
東京	27	2.19	8	2.44	4	3.18	7	1.96	8	1.65
福岡	27	2.19	7	2.79	4	3.18	8	1.71	8	1.65
鹿児島	26	2.27	5	3.90	4	3.18	9	1.52	8	1.65
神奈川	24	2.46	6	3.25	3	4.23	7	1.96	8	1.65
山口	24	2.46	7	2.79	5	2.54	6	2.28	6	2.20
沖縄	23	2.57	4	4.88	5	2.54	9	1.52	5	2.64
兵庫	22	2.69	5	3.90	1	12.70	9	1.52	7	1.89
岩手	21	2.81	5	3.90	3	4.23	9	1.52	4	3.30
(平均)	31.11	1.90	8.79	2.22	4.83	2.63	9.26	1.48	8.23	1.60

表3 戦前知事の在任状況（「他の期の平均－Ⅲ期」の平均在任年数差ソート）

	戦前知事数	平均在任年数	I 期	(平均)	Ⅱ期	(平均)	Ⅲ期	(平均)	Ⅳ期	(平均)	他とⅢとの差
岩手	21(人)	2.81(年)	5(人)	3.90(年)	3(人)	4.23(年)	9(人)	1.52(年)	4(人)	3.30(年)	2.26(年)
兵庫	22	2.69	5	3.90	1	12.70	9	1.52	7	1.89	1.97
沖縄	23	2.57	4	4.88	5	2.54	9	1.52	5	2.64	1.72
岡山	29	2.04	5	3.90	5	2.54	11	1.25	8	1.65	1.28
長崎	29	2.04	7	2.79	4	3.18	11	1.25	7	1.89	1.28
鹿児島	26	2.27	5	3.90	4	3.18	9	1.52	8	1.65	1.15
熊本	30	1.97	5	3.90	7	1.81	11	1.25	7	1.89	1.14
青森	36	1.64	8	2.44	5	2.54	14	0.98	9	1.47	1.09
宮崎	33	1.79	10	1.95	4	3.18	12	1.14	7	1.89	1.02
山形	28	2.11	8	2.44	4	3.18	9	1.52	7	1.89	0.87
京都	28	2.11	8	2.44	2	6.35	9	1.52	9	1.47	0.87
千葉	31	1.91	9	2.17	5	2.54	10	1.37	7	1.89	0.79
滋賀	31	1.91	9	2.17	4	3.18	10	1.37	8	1.65	0.79
神奈川	24	2.46	6	3.25	3	4.23	7	1.96	8	1.65	0.71
福岡	27	2.19	7	2.79	4	3.18	8	1.71	8	1.65	0.68
石川	35	1.69	10	1.95	5	2.54	11	1.25	9	1.47	0.65
和歌山	30	1.97	9	2.17	5	2.54	9	1.52	7	1.89	0.64
高知	33	1.79	9	2.17	6	2.12	10	1.37	8	1.65	0.60
埼玉	36	1.64	11	1.77	4	3.18	11	1.25	10	1.32	0.57
大阪	28	2.11	8	2.44	3	4.23	8	1.71	9	1.47	0.56
栃木	31	1.91	9	2.17	5	2.54	9	1.52	8	1.65	0.54
愛知	31	1.91	10	1.95	2	6.35	9	1.52	10	1.32	0.54
鳥取	34	1.74	11	1.77	6	2.12	10	1.37	7	1.89	0.52
大分	34	1.74	10	1.95	6	2.12	10	1.37	8	1.65	0.52
広島	37	1.60	9	2.17	5	2.54	11	1.25	12	1.10	0.50
佐賀	37	1.60	11	1.77	7	1.81	11	1.25	8	1.65	0.50
福井	32	1.85	9	2.17	5	2.54	9	1.52	9	1.47	0.45
島根	32	1.85	9	2.17	5	2.54	9	1.52	9	1.47	0.45
奈良	29	2.04	6	3.25	6	2.12	8	1.71	9	1.47	0.45
福島	35	1.69	10	1.95	6	2.12	10	1.37	9	1.47	0.45
茨城	35	1.69	10	1.95	5	2.54	10	1.37	10	1.32	0.45
新潟	35	1.69	8	2.44	7	1.81	10	1.37	10	1.32	0.45
山梨	35	1.69	12	1.63	5	2.54	10	1.37	8	1.65	0.45
秋田	36	1.64	11	1.77	7	1.81	10	1.37	8	1.65	0.38
静岡	33	1.79	10	1.95	6	2.12	9	1.52	8	1.65	0.37
岐阜	30	1.97	8	2.44	5	2.54	8	1.71	9	1.47	0.35
北海道	27	2.19	8	2.44	6	2.12	7	1.96	6	2.20	0.31
東京	27	2.19	8	2.44	4	3.18	7	1.96	8	1.65	0.31
香川	34	1.74	11	1.77	4	3.18	9	1.52	10	1.32	0.29
富山	31	1.91	12	1.63	4	3.18	8	1.71	7	1.89	0.26
山口	24	2.46	7	2.79	5	2.54	6	2.28	6	2.20	0.24
愛媛	35	1.69	12	1.63	4	3.18	9	1.52	10	1.32	0.22
群馬	36	1.64	11	1.77	8	1.59	9	1.52	8	1.65	0.16
三重	36	1.64	10	1.95	7	1.81	9	1.52	10	1.32	0.16
長野	29	2.04	9	2.17	4	3.18	7	1.96	9	1.47	0.11
徳島	33	1.79	11	1.77	6	2.12	8	1.71	8	1.65	0.10
宮城	34	1.74	13	1.50	4	3.18	6	2.28	11	1.20	-0.66

表 4 戦前知事の在任状況（Ⅲ期平均在任年数短期順ソート）

	Ⅲ期	(平均)	戦前知事数	平均在任年数	I 期	(平均)	Ⅱ期	(平均)	Ⅳ期	(平均)
青森	14(人)	0.98(年)	36(人)	1.64(年)	8(人)	2.44(年)	5(人)	2.54(年)	9(人)	1.47(年)
宮崎	12	1.14	33	1.79	10	1.95	4	3.18	7	1.89
広島	11	1.25	37	1.60	9	2.17	5	2.54	12	1.10
佐賀	11	1.25	37	1.60	11	1.77	7	1.81	8	1.65
埼玉	11	1.25	36	1.64	11	1.77	4	3.18	10	1.32
石川	11	1.25	35	1.69	10	1.95	5	2.54	9	1.47
熊本	11	1.25	30	1.97	5	3.90	7	1.81	7	1.89
岡山	11	1.25	29	2.04	5	3.90	5	2.54	8	1.65
長崎	11	1.25	29	2.04	7	2.79	4	3.18	7	1.89
秋田	10	1.37	36	1.64	11	1.77	7	1.81	8	1.65
福島	10	1.37	35	1.69	10	1.95	6	2.12	9	1.47
茨城	10	1.37	35	1.69	10	1.95	5	2.54	10	1.32
新潟	10	1.37	35	1.69	8	2.44	7	1.81	10	1.32
山梨	10	1.37	35	1.69	12	1.63	5	2.54	8	1.65
鳥取	10	1.37	34	1.74	11	1.77	6	2.12	7	1.89
大分	10	1.37	34	1.74	10	1.95	6	2.12	8	1.65
高知	10	1.37	33	1.79	9	2.17	6	2.12	8	1.65
千葉	10	1.37	31	1.91	9	2.17	5	2.54	7	1.89
滋賀	10	1.37	31	1.91	9	2.17	4	3.18	8	1.65
群馬	9	1.52	36	1.64	11	1.77	8	1.59	8	1.65
三重	9	1.52	36	1.64	10	1.95	7	1.81	10	1.32
愛媛	9	1.52	35	1.69	12	1.63	4	3.18	10	1.32
香川	9	1.52	34	1.74	11	1.77	4	3.18	10	1.32
静岡	9	1.52	33	1.79	10	1.95	6	2.12	8	1.65
福井	9	1.52	32	1.85	9	2.17	5	2.54	9	1.47
島根	9	1.52	32	1.85	9	2.17	5	2.54	9	1.47
栃木	9	1.52	31	1.91	9	2.17	5	2.54	8	1.65
愛知	9	1.52	31	1.91	10	1.95	2	6.35	10	1.32
和歌山	9	1.52	30	1.97	9	2.17	5	2.54	7	1.89
山形	9	1.52	28	2.11	8	2.44	4	3.18	7	1.89
京都	9	1.52	28	2.11	8	2.44	2	6.35	9	1.47
鹿児島	9	1.52	26	2.27	5	3.90	4	3.18	8	1.65
沖縄	9	1.52	23	2.57	4	4.88	5	2.54	5	2.64
兵庫	9	1.52	22	2.69	5	3.90	1	12.70	7	1.89
岩手	9	1.52	21	2.81	5	3.90	3	4.23	4	3.30
徳島	8	1.71	33	1.79	11	1.77	6	2.12	8	1.65
富山	8	1.71	31	1.91	12	1.63	4	3.18	7	1.89
岐阜	8	1.71	30	1.97	8	2.44	5	2.54	9	1.47
奈良	8	1.71	29	2.04	6	3.25	6	2.12	9	1.47
大阪	8	1.71	28	2.11	8	2.44	3	4.23	9	1.47
福岡	8	1.71	27	2.19	7	2.79	4	3.18	8	1.65
長野	7	1.96	29	2.04	9	2.17	4	3.18	9	1.47
北海道	7	1.96	27	2.19	8	2.44	6	2.12	6	2.20
東京	7	1.96	27	2.19	8	2.44	4	3.18	8	1.65
神奈川	7	1.96	24	2.46	6	3.25	3	4.23	8	1.65
宮城	6	2.28	34	1.74	13	1.50	4	3.18	11	1.20
山口	6	2.28	24	2.46	7	2.79	5	2.54	6	2.20

表 5 府県の例 1 (佐賀県：知事数最多)

年	総理大臣	内務大臣	内務次官	赴任 (前職)	知事 名	転任先等	在任期間
明 18	12.22 伊藤博文	12.22 山県有朋	(18.6.13 ~)				
明 19			3.03 芳川顯正	7.19 佐賀県令→	鎌田景弼	→死去 (21.6.18)	1 年 11.0 月
明 20							
明 21	4.30 黒田清隆	4.30 山県有朋					
明 22	12.24 山県有朋	12.24 (兼) 山県			石井邦猷	→元老院議員	1 年 5.9 月
明 23		5.17 西郷従道	5.17 白根専一	12.24 栃木県知事→	樺山資雄	→非職	2 年 7.9 月
明 24	5.06 松方正義	5.06 西郷従道					
明 25		6.01 品川弥二郎					
		3.11 副島権臣					
		6.08 (兼) 松方					
		7.14 河野敏謙	7.16 北垣国道				
			7.19 渡辺千秋				
	8.08 伊藤博文	8.08 井上馨		8.20 宮崎県知事→	永峰弥吉	→死去 (27.1.12)	1 年 4.8 月
明 26							
明 27			1.31 松岡康毅	1.25 元農商務省山林局長→	田辺輝実	→三重県知事	2 年 6.6 月
明 28		10.15 野村靖					
明 29		2.03 芳川顯正					
		4.14 板垣退助					
	9.18 松方正義	9.18 板垣退助		8.12 元農商務省権大書記→	大山綱昌	→非職	0 年 7.9 月
		9.20 樺山資雄	11.21 松平正直				
明 30			1.06 中村元雄	4.07 宮城県内務部長→	武内維積	→非職	1 年 2.6 月
明 31	1.12 伊藤博文	1.12 芳川顯正	1.12 松岡康毅	6.25 元大分県知事→	平山靖彦	→免本官	0 年 0.7 月
	6.30 大隈重信	6.30 板垣退助	7.04 鈴木充美	7.16 非職佐賀県知事→	武内維積	→非職	0 年 5.2 月
	11.08 山県有朋	11.08 西郷従道	11.09 松平正直	12.21 名古屋地方裁判所検事正→	関清英	→群馬県知事	2 年 3.4 月
明 32			4.07 小松原英太郎				
明 33	10.19 伊藤博文	10.19 末松謙澄	10.25 大森鍾一				
明 34				4.02 鳥取県知事→	香川輝	→免本官	7 年 0.4 月
明 35	6.02 桂太郎	6.02 内海忠勝					
明 36		7.15 児玉源太郎	2.08 山県伊三郎				
		10.12 (兼) 桂					
明 37		2.20 芳川顯正					
明 38		9.16 (兼) 清浦					
明 39	1.07 西園寺公望	1.07 原敬	1.17 吉原三郎				
明 40							
明 41				4.14 警保局警務課長→	井上孝哉	→免本官	0 年 8.5 月
	7.14 桂太郎	7.14 平田東助	7.20 一木喜徳郎	12.28 宮城県内務部長→	西村陸奥夫	→休職	2 年 9.3 月
明 42							
明 43							
明 44	8.30 西園寺公望	8.30 原敬	9.04 床次竹二郎	10.06 東京府内務部長→	不破彦彦	→休職	2 年 8.1 月
大 1	12.21 桂太郎	12.21 大浦兼武	12.21 押川則吉				
大 2	2.20 山本権兵衛	2.20 原敬	2.21 水野錬太郎				
大 3	4.16 大隈重信	4.16 (兼) 大隈	4.16 下岡忠治	6.09 山梨県知事→	若林實蔵	→香川県知事	0 年 7.0 月
大 4		1.07 大浦兼武	7.02 久保田政周	1.08 東京府内務部長→	石橋和	→岐阜県知事	2 年 0.3 月
大 5	10.09 寺内正毅	10.09 後藤新平	12.27 水野錬太郎				
大 6				1.17 茨城県知事→	岡田宇之助	→休職	0 年 11.0 月
				12.17 元群馬県知事→	大芝慈吉	→休職	1 年 4.0 月

[illegible]

表 6 府県の例 2 (岩手県：知事数最少、Ⅲ期の異動大)

年	総理大臣	内務大臣	内務次官	赴任 (前職)	知事名	転任先等	在任期間
明 18	12.22 伊藤博文	12.22 山県有朋	(18.6.13 ~)				
明 19			3.03 芳川顯正	7.19 岩手県令→	石井省一郎	→茨城県知事	4 年 9.2 月
明 20							
明 21	4.30 黒田清隆	4.30 山県有朋					
明 22	12.24 山県有朋	12.24 (兼) 山県					
明 23		5.17 西郷従道	5.17 白根専一				
明 24				4.24 文部省普通学務局長→	服部一三	→広島県知事	7 年 3.2 月
	5.06 松方正義	5.06 西郷従道					
明 25		6.01 品川弥二郎					
		3.11 副島種臣					
		6.08 (兼) 松方					
		7.14 河野敏謙	7.16 北垣国道				
			7.19 渡辺千秋				
	8.08 伊藤博文	8.08 井上馨					
明 26							
明 27			1.31 松岡康毅				
		10.15 野村靖					
明 28							
明 29		2.03 芳川顯正					
		4.14 板垣退助					
	9.18 松方正義	9.18 板垣退助					
			11.21 松平正直				
明 30			1.06 中村元雄				
明 31	1.12 伊藤博文	1.12 芳川顯正	1.12 松岡康毅				
	6.30 大隈重信	6.30 板垣退助	7.04 鈴木充美	7.28 高知県知事→	末弘直方	→休職	1 年 9.0 月
	11.08 山県有朋	11.08 西郷従道	11.09 松平正直				
明 32			4.07 小松原英太郎				
明 33				4.27 新潟地方裁判所検事正→	北条元利	→休職	4 年 6.7 月
	10.19 伊藤博文	10.19 末松謙澄	10.25 大森鐘一				
明 34							
	6.02 桂太郎	6.02 内海忠勝					
明 35			2.08 山県伊三郎				
明 36		7.15 見玉源太郎					
		10.12 (兼) 桂					
明 37		2.20 芳川顯正		11.17 休職長野県知事→	押川則吉	→熊本県知事	2 年 1.8 月
明 38		9.16 (兼) 清浦					
明 39	1.07 西園寺公望	1.07 原敬	1.17 吉原三郎	1.11 熊本県第一部長→	笠井信一	→静岡県知事	5 年 1.7 月
明 40							
明 41	7.14 桂太郎	7.14 平田東助	7.20 一木喜徳郎				
明 42							
明 43							
明 44	8.30 西園寺公望	8.30 原敬	9.04 床次竹二郎				
大 1	12.21 桂太郎	12.21 大浦兼武	12.21 押川則吉				
大 2	2.20 山本権兵衛	2.20 原敬	2.21 水野錬太郎	3.03 香川県内務部長→	堤定次郎	→休職	1 年 3.3 月
大 3	4.16 大隈重信	4.16 (兼) 大隈	4.16 下岡忠治	6.09 元台湾総督府蕃務総長→	大津麟平	→徳島県知事	4 年 10.3 月
大 4		1.07 大浦兼武	7.02 久保田政周				
大 5	10.09 寺内正毅	10.09 後藤新平	12.27 水野錬太郎				
大 6							

政権交代下の地方官人事（鵜養）

[illegible]

表 7 府県の例 3 (青森県：Ⅱ期の異動最多)

年	総理大臣	内務大臣	内務次官	赴任 (前職)	知事名	転任先等	在任期間
明 18	12.22 伊藤博文	12.22 山県有朋	(18.6.13 ~)				
明 19			3.03 芳川顯正	7.19 →元老院議員	鍋島幹	→広島県知事	3 年 5.3 月
明 20							
明 21	4.30 黒田清隆	4.30 山県有朋					
明 22	12.24 山県有朋	12.24 (兼) 山県					
明 23		5.17 西郷従道	5.17 白根專一	12.28 →総務局図書課長	佐和正	→免本官	6 年 7.6 月
明 24	5.06 松方正義	5.06 西郷従道					
明 25		6.01 品川弥二郎					
		3.11 副島権臣					
		6.08 (兼) 松方					
		7.14 河野敏謙	7.16 北垣国道				
			7.19 渡辺千秋				
	8.08 伊藤博文	8.08 井上馨					
明 26							
明 27			1.31 松岡康毅				
明 28		10.15 野村靖					
明 29		2.03 芳川顯正					
		4.14 板垣退助					
	9.18 松方正義	9.18 板垣退助		8.12 →台中県知事	牧朴真	→愛媛県知事	1 年 3.1 月
		9.20 樺山資紀					
明 30			11.21 松平正直				
明 31	1.12 伊藤博文	1.12 芳川顯正	1.06 中村元雄	1.13 →元台湾総督府宜蘭支庁長	河野主一郎	→非職	1 年 2.3 月
	6.30 大隈重信	6.30 板垣退助	1.12 松岡康毅				
	11.08 山県有朋	11.08 西郷従道	7.04 鈴木充美				
			11.09 松平正直				
明 32			4.07 小松原英太郎	1.21 →元埼玉県知事	宗像政	→福井県知事	2 年 2.9 月
明 33							
	10.19 伊藤博文	10.19 末松謙澄	10.25 大森鐘一				
明 34				4.17 →警保局保安課長	山之内一六	→通信省鉄道局長	3 年 0.2 月
明 35	6.02 桂太郎	6.02 内海忠勝					
明 36		7.15 兒玉源太郎	2.08 山県伊三郎				
		10.12 (兼) 桂					
明 37		2.20 芳川顯正		4.26 →鉄道省鉄道局長	大塚勝太郎	→土木局長	0 年 6.7 月
				11.17 →京都府内務部長	西沢正太郎	→福島県知事	3 年 6.8 月
明 38		9.16 (兼) 清浦					
明 39	1.07 西園寺公望	1.07 原敬	1.17 吉原三郎				
明 40							
明 41	7.14 桂太郎	7.14 平田東助		6.12 →山梨県知事	武田千代三郎	→休職	4 年 11.7 月
明 42			7.20 一木喜徳郎				
明 43							
明 44	8.30 西園寺公望	8.30 原敬	9.04 床次竹二郎				
大 1	12.21 桂太郎	12.21 大浦兼武	12.21 押川則吉				
大 2	2.20 山本権兵衛	2.20 原敬	2.21 水野錬太郎	6.01 →通信省管船局長	田中武雄	→休職	0 年 10.9 月
大 3	4.16 大隈重信	4.16 (兼) 大隈	4.16 下岡忠治	4.28 →警視庁警務部長	小浜松次郎	→休職	2 年 8.7 月
大 4		1.07 大浦兼武	7.02 久田政周				
大 5	10.09 寺内正毅	10.09 後藤新平	12.27 水野錬太郎				

政権交代下の地方官人事（鵜養）

[illegible]

表 8 府県の例 4 (宮城県：Ⅲ期の異動最少)

年	総理大臣	内務大臣	内務次官	赴任 (前職)	知事 名	転任先等	在任期間
明 18	12.22 伊藤博文	12.22 山県有朋	(18.6.13 ~)				
明 19			3.03 芳川顕正	7.19 宮城県令→	松平正直	→熊本県知事	4 年 8.7 月
明 20							
明 21	4.30 黒田清隆	4.30 山県有朋					
明 22	12.24 山県有朋	12.24 (兼) 山県					
明 23		5.17 西郷従道	5.17 白根専一				
明 24				4.09 石川県知事→	船越衛	→免本官	2 年 9.4 月
	5.06 松方正義	5.06 西郷従道					
明 25		6.01 品川弥二郎					
		3.11 副島種臣					
		6.08 (兼) 松方					
		7.14 河野敏謙	7.16 北垣国道				
			7.19 渡辺千秋				
	8.08 伊藤博文	8.08 井上馨					
明 26							
明 27			1.31 松岡康毅	1.20 愛媛県知事→	勝間田総	→新潟県理事	3 年 2.6 月
		10.15 野村靖					
明 28							
明 29		2.03 芳川顕正					
		4.14 板垣退助					
	9.18 松方正義	9.18 板垣退助					
			11.21 松平正直				
明 30			1.06 中村元雄	4.07 岐阜県知事→	樺山資雄	→宮崎県知事	1 年 1.9 月
明 31	1.12 伊藤博文	1.12 芳川顕正	1.12 松岡康毅	6.03 大阪府知事→	時任為基	→免本官	0 年 1.8 月
	6.30 大隈重信	6.30 板垣退助	7.04 鈴木充美	7.28 熊本県知事→	大浦兼武	→免本官	0 年 1.1 月
				8.09 栃木県知事→	千頭清臣	→新潟県理事	1 年 5.4 月
	11.08 山県有朋	11.08 西郷従道	11.09 松平正直				
明 32			4.07 小松原英太郎	1.19 岡山県知事→	高橋親章	→京都府知事	0 年 2.0 月
明 33				3.19 岐阜県知事→	野村政明	→石川県知事	0 年 7.5 月
	10.19 伊藤博文	10.19 末松謙澄	10.25 大森鐘一	10.31 静岡県知事→	小野田元照	→香川県知事	1 年 3.3 月
明 34	6.02 桂太郎	6.02 内海忠勝					
明 35		7.15 児玉源太郎	2.08 山県伊三郎	2.08 福井県知事→	宗像政	→休職	0 年 11.5 月
明 36		10.12 (兼) 桂		1.22 土木局長→	田辺輝実	→免本官	2 年 10.8 月
明 37		2.20 芳川顕正					
明 38		9.16 (兼) 清浦		12.14 静岡県知事→	亀井英三郎	→警視總監	2 年 7.2 月
明 39	1.07 西園寺公望	1.07 原敬	1.17 吉原三郎				
明 40							
明 41	7.14 桂太郎	7.14 平田東助	7.20 一木喜徳郎	7.20 岡山県知事→	寺田祐之	→広島県知事	4 年 7.3 月
明 42							
明 43							
明 44	8.30 西園寺公望	8.30 原敬	9.04 床次竹二郎				
大 1	12.21 桂太郎	12.21 大浦兼武	12.21 押川則吉				
大 2	2.20 山本権兵衛	2.20 原敬	2.21 水野錬太郎	2.27 休職新潟県知事→	森正隆	→休職	2 年 1.3 月
大 3	4.16 大隈重信	4.16 (兼) 大隈	4.16 下岡忠治	4.28 三重県知事→	俵孫一	→北海道庁長官	1 年 3.5 月
大 4		1.07 大浦兼武	7.02 久保田政周	8.12 富山県知事→	浜田恒之助	→免本官	3 年 8.2 月
大 5	10.09 寺内正毅	10.09 後藤新平	12.27 水野錬太郎				
大 6							

政権交代下の地方官人事（鵜養）

[illegible]

参考 各内閣時の内務省幹部

年	総理大臣	内務大臣	内務次官	地方局長 (17.2.25)	警保局長 (17.2.25)	警視總監	神社局長	土木局長	衛生局長
明 18	12.22 伊藤博文	12.22 山県有朋	(18.6.13)	6.25 山崎直胤					
明 19			3.03 芳川顕正		清浦奎吾	12.22 三島通庸			
明 20				3.08 末松謙澄			3.03 丸岡莞爾	4.27 西村捨三	3.03 長与専斎
明 21	4.30 黒田清隆	4.30 山県有朋							
明 22	12.24 山県有朋	12.24 (兼) 山県				10.24 折田平内	10.29 国重正文		
明 23		5.17 西郷従道	5.17 白根専一	11.21 大森鐘一		12.24 田中光顕		8.20 中村孝禰 6.14 古市公威	
明 24					4.09 小松原英太郎	4.02 園田安賀		7.24 (廃官) 8.16 古市公威	
	5.06 松方正義	5.06 西郷従道							
		6.01 品川弥二郎							8.16 (兼) 荒川
明 25		3.11 副島種臣							1.17 荒川邦蔵
		6.08 (兼) 松方							
		7.14 河野敏謙	7.16 北垣国道 7.19 渡辺千秋						
	8.08 伊藤博文	8.08 井上馨			8.27 (兼) 大森鐘一 11.01 高崎親章				11.17 後藤新平
					3.10 小野田元熙				
明 26				3.10 江木千之			6.01 阿部浩		
明 27			1.31 松岡康毅					6.22 都筑馨六	2.07 高田善一
		10.15 野村靖							
明 28									
明 29		2.03 芳川顕正							9.07 後藤新平
		4.14 板垣退助		4.20 三崎亀之助			2.07 安弘伴一郎	2.12 (兼) 古市	
	9.18 松方正義	9.18 板垣退助				9.28 山田為瑯			
		9.20 樺山資紀	11.21 松平正直		11.21 寺原長輝				
明 30			1.06 中村元雄						
明 31	1.12 伊藤博文	1.12 芳川顕正	1.12 松岡康毅	1.21 荒川邦蔵	1.21 牧杜真	1.21 園田安賀	8.30 久米金弥		3.08 長谷川泰
	6.30 大隈重信	6.30 板垣退助	7.04 鈴木充美	7.16 山下千代雄	7.05 小倉久	7.16 西山志澄			
	11.08 山県有朋	11.08 西郷従道	11.09 松平正直	11.12 深野一三		11.09 大浦兼武	11.28 斯波淳六郎	11.12 田辺靖実	
明 32			4.07 小松原英太郎	4.07 柴田家門	4.07 安築兼道				
明 33	10.19 伊藤博文	10.19 末松謙澄	10.25 大森鐘一	10.25 中根重一	10.25 田中貴道	10.19 安築兼道	4.27 李家裕二		
明 34	6.02 桂太郎	6.02 内海忠勝		7.05 山県伊三郎	6.05 鈴木定直	6.02 大浦兼武	4.17 桜井惣		
明 35			2.08 山県伊三郎	2.08 吉原三郎	2.08 安立綱之		4.14 白仁武		10.24 森田茂吉
明 36		7.15 児玉源太郎			9.22 有松英義	9.22 安立綱之		1.22 南部光臣	9.03 窪田静太郎
		10.12 (兼) 桂							
明 37		2.20 芳川顕正			11.17 仲小路廉		1.25 水野鍾太郎	6.06 仲小路廉 11.17 犬塚勝太郎	
明 38		9.16 (兼) 清浦				9.10 関清英			
明 39	1.07 西園寺公望	1.07 原敬	1.17 吉原三郎	1.17 床次竹二郎	1.17 古賀藤造	1.17 安築兼道			
明 40									
明 41	7.14 桂太郎	7.14 平田東助	7.20 一木喜徳郎		7.20 有松英義	7.20 亀井英三郎	7.06 井上友一		
明 42									
明 43									
明 44	8.30 西園寺公望	8.30 原敬	9.04 床次竹二郎	9.04 (兼) 水野	9.04 古賀藤造	9.04 安築兼道		9.14 水野鍾太郎	12.15 小橋一太
大 1	12.21 桂太郎	12.21 大浦兼武	12.21 押川則吉	12.22 湯浅倉平	12.22 太田政弘	12.21 川上親晴			
大 2	2.20 山本権兵衛	2.20 原敬	2.21 水野鍾太郎	6.01 小橋一太	2.26 阿部七郎	2.21 安築兼道		12.22 久保田政周	6.01 杉山四五郎
大 3	4.16 大隈重信	4.16 (兼) 大隈	4.16 下岡忠治	4.28 渡辺勝三郎	4.18 安河内麻吉	4.16 伊沢多喜男		4.28 小橋一太	4.28 中川望
大 4		1.07 大浦兼武	7.02 久保田政周		8.12 湯浅倉平	8.12 西久保弘道	7.02 斯波淳六郎 10.04 塚本清治		
大 5	10.09 寺内正毅	10.09 後藤新平	12.27 水野鍾太郎		10.11 永田秀次郎	10.09 岡田文次			
大 6				12.17 添田敬一郎					12.17 杉山四五郎

政権交代下の地方官人事（補養）

大 7			4.23 水野謙太郎	4.25 小橋一太	10.09 (兼) 塚本	10.03 川村竹治	9.30 岡喜七郎		4.25 堀田貢		
大 8	9.29 原敬		9.29 床次竹二郎								6.07 潮恵之輔
大 9											
大 10					4.21 塚本清治	5.27 湯地幸平					
大 11	11.13 高橋是清 6.12 加藤友三郎	11.13 床次竹二郎 6.12 水野謙太郎		6.14 川村竹治 10.24 堀田貢 6.15 井上孝哉	11.01 潮恵之輔	6.14 後藤文夫	6.12 堀田貢 10.24 赤池濃	8.29 山田準次郎	6.14 長谷川久一		11.01 横山助成
大 12											
大 13	9.02 山本権兵衛 1.07 清浦奎吉 6.11 加藤高明	9.02 後藤新平 1.07 水野謙太郎 6.11 若槻礼次郎	9.05 塚本清治 1.09 井上孝哉 6.11 湯浅倉平 9.04 川崎卓吉	9.05 湯浅倉平 1.07 赤池濃 6.11 太田政弘 9.16 松村義一	10.12 岡田忠彦 1.09 藤沼庄平 6.11 川崎卓吉 9.16 松村義一	10.25 大海原重義 5.23 佐上信一	10.25 大海原重義 5.23 佐上信一	12.15 堀切善次郎 9.16 次田大三郎	10.25 山田準次郎		
大 14											
大 15	1.30 若槻礼次郎	1.30 (兼) 若槻									
昭 2	4.20 田中義一	6.03 浜口雄幸 4.20 鈴木喜三郎	4.23 安河内麻吉 7.19 杉山四五郎 5.16 潮恵之輔	4.22 山岡薫之助			4.20 宮田光雄 7.19 吉田茂	9.28 赤木朝治 5.07 大海原重義 7.19 吉田茂	10.25 長岡隆一郎	10.25 山田準次郎	
昭 3		5.04 (兼) 田中 5.23 望月圭介		5.25 佐上信一		5.25 横山助成					
昭 4							6.25 長岡隆一郎 7.03 丸山鶴吉				
昭 5	7.02 浜口雄幸	7.02 安達謙蔵		7.05 次田大三郎		7.03 大塚惟精		7.23 池田清	7.05 三辺長治	9.10 赤木朝治	
昭 6	4.14 若槻礼次郎	4.14 安達謙蔵		4.15 三辺長治		4.15 次田大三郎 8.28 岡正雄 12.13 森岡二郎	4.14 高橋守雄	6.27 石田馨	4.15 丹羽七郎		
昭 7	12.13 大義毅	12.13 中橋徳五郎	8.08 次田大三郎 12.13 河原田稼吉	12.18 大野緑一郎 3.04 安井英二		12.13 長延連 1.12 長谷川久一 1.29 大野緑一郎			12.18 湯沢三千男	12.21 大島辰次郎	
昭 8		3.16 (兼) 犬養 3.25 鈴木喜三郎 5.26 山本達夫	5.27 潮恵之輔						6.28 唐沢俊樹		
昭 9	7.08 岡田啓介	7.08 後藤文夫	7.10 丹羽七郎 6.28 赤木朝治 3.13 湯沢三千男			5.27 松本学	5.27 藤沼庄平		7.10 広瀬久忠	10.30 岡田文秀	
昭 10				1.15 岡田周造 3.13 大村清一			10.26 小栗一雄	1.15 籠哲二			
昭 11	3.09 広田弘毅	3.09 潮恵之輔				3.13 萱場重蔵	3.13 石田馨		3.13 岡田文秀	3.13 扶間茂	
昭 12	2.02 林銑十郎 6.04 近衛文麿	2.02 河原田稼吉 6.04 馬場狭一 12.14 末次信正	2.10 篠原英太郎 6.05 広瀬久忠 12.24 羽生雅則 6.24 籠哲二	2.10 大村清一 6.05 安部源基 12.24 富田健治 6.24 本間精	2.10 坂千秋	2.10 横山助成 6.05 斎藤樹	1.08 早川三郎 2.10 横山助成 6.05 斎藤樹	2.10 児玉九一	2.10 赤松小寅 11.04 安藤狂四郎		
昭 13							12.24 安部源基				1.11 (厚生省)
昭 14	1.05 平沼騏一郎 8.30 阿部信行	1.05 木戸幸一 8.30 小原直	9.05 大達茂雄	4.17 扶間茂	1.11 萱場重蔵 9.05 本間精	1.11 安藤狂四郎 9.05 本間精	4.17 中野与吉郎 9.05 池田清	4.17 山崎巖	1.11 扶間茂 4.17 山崎巖		
昭 15	1.16 米内光政 7.22 近衛文麿	1.16 児玉秀雄 7.22 安井英二	7.24 坂間茂 12.21 平沼騏一郎	7.24 留岡幸男	1.19 山崎巖 7.24 藤原孝夫 12.23 橋本清吉	1.19 山崎巖 7.24 藤原孝夫 12.23 橋本清吉	4.09 飯沼一省 11.09 石井政一		1.19 成田一郎		
昭 16	7.18 近衛文麿 10.18 東条英機	7.18 田辺治通 10.18 (兼) 東条									
昭 17		2.17 湯沢三千男 4.20 安藤紀三郎	10.18 湯沢三千男 2.17 山崎巖 4.22 唐沢俊樹	10.20 成田一郎 6.15 古井喜実 7.01 新居善太郎 4.18 瀧尾弘吉	10.20 今松治郎 6.15 三好重夫 4.22 町村金五 7.25 古井喜実 4.09 水池亮	10.20 留岡幸男 6.15 吉永時次 4.22 薄田美朝 7.25 坂信弥	10.01 (坂) 飯沼 10.31 (廣官)		10.20 新居善太郎		
昭 18									7.01 宮村才一郎		
昭 19											
昭 20	7.22 小磯重昭 4.07 鈴木實太郎	7.22 大達茂雄 4.07 安倍源基	7.25 山崎巖 4.09 瀧尾弘吉	4.09 入江誠一郎 (~21.1.25)		7.25 坂信弥 4.09 町村金五 (~20.8.19)	7.25 坂信弥 4.09 町村金五 (~20.8.19)		4.21 堀田健男 (~20.9.12)		

